

釈徹宗の随縁探訪 親鸞聖人の白道をたどる ②



ゲスト
岡村喜史さん

真宗史が専門の岡村喜史さんを迎えての対談の
2回目です。今回は若き日の親鸞聖人の歩みに
スポットを当てていきます。

比叡山の横川で不断念仏

釈 前は、親鸞聖人のご誕生から出家得度の頃
までについておうかがいしました。今回は、比叡
山でのご修行時代から六角堂での参籠、そして法
然聖人のもとに身を投じられるまでについて、お
話を聞かせていただこうと思います。

岡村 親鸞聖人は二十九歳まで比叡山で天台宗の
僧侶をされていた、というのは崩せないことです。
釈 これはもう間違いないと。比叡山での二十年
に及ぶ修行期間の最後の時、恵信尼さまのお手紙

では「堂僧」であったとありますが。
岡村 比叡山の中にある常行三昧堂、常行堂とも
いわれますね。そこで不断念仏の修行をするのが、
当時の堂僧のようです。現在、常行堂は比叡山の
西塔にしか残っていないんですね。比叡山は織田
信長によつて焼かれてしまい、その後に復興され
た常行堂は西塔だけなのですが、親鸞聖人の頃は
東塔、西塔、横川と三カ所ともに常行堂があった
ことは記録でわかります。ですから、親鸞聖人は
横川で主に修行されていたという『御伝鈔』の記
録によつて、横川の常行堂におられたのだらうな、
というのは想像できますね。

釈 三塔のうち、横川の常行堂におられたと。

岡村 そうです。横川には、恵心院という恵心僧

都（源信和尚）がおられたところもありますので、
そういった環境で念仏に対する意識を育んでいか
れたのではないかと思います。当時の堂僧という

のは、比叡山の中ではそれほど高い地位じゃない
と考えられています。念仏自体、比叡山の中では
それほど重要なものではありませんので。

釈 どちらかと言えば脇役なんですね。

岡村 ええ。比叡山は総合的に仏教を学んだり修
行したりする所なので、その中の一つとして不断
念仏、常行三昧というものがあつたようです。た
だし、それは根幹の僧侶の修行ではなかつたよう
ですね。

六角堂へ

釈 やがて、親鸞聖人は、聖徳太子の墓所である
磯長の御廟（大阪府太子町）を訪ねたり、京都の
六角堂に参籠なさつたりするわけですが、親鸞聖
人には太子信仰という大変大きな特徴があると思
います。

岡村 六角堂が聖徳太子の建てられたお寺という



ゲストの岡村喜史さんと釈徹宗さん

伝承がありますので、そういうところから太子信仰というものを比叡山の段階で持たれたということも考えられると思います。しかし、聖徳太子を思つて六角堂に行かれたのかな？ と。

釈 と、おっしゃいますと？

岡村 六角堂は町の中にあるんですよ。町の中の雑踏の中に足を運ばれるんです。比叡山という限られた僧侶しかいないところを出て、あえて六角堂を選ばれた。観音さまなら清水寺（京都市東山区）や石山寺（滋賀県大津市）など周辺にはいろいろあるんですけども、あえて六角堂へ行かれたというのは、民衆とともに暮らしていくことをその段階で選んでおられたんじゃないかなというふうに思っています。ずっと後のことになります。が、関東の佐貫（群馬県明和町）での三部経の千部読誦の話にしても、飢饉に苦しむ民衆のために自分が何らかの役に立たないだろうかと思つて三

部経を読み始めたとおっしゃっています。ただ、これは自力だからと思ひ返されて読むのを中止されませんが、人を救う、人の役に立つ、自分ができるとは小さなことかもしれないけど、人のために生きていくんだということ、ずっと追い求めるところに親鸞聖人に学んでいくべきことがあるのかな、と思つています。

釈 そうですね。親鸞聖人が六角堂に百日間お籠もりになつたことについては、比叡山から百日間通つて籠もつたという説をとられる先生がいらつしやいます。

岡村 ええ。ただ、私はちよつと難しいと考えます。それはまず、「恵信尼消息」には「殿の比叡の山に堂僧つとめておはしましけるが、山を出でて、六角堂に百日籠らせたまひ」（註釈版聖典814頁）つて書いてあります。

釈 親鸞聖人の妻、恵信尼さまが娘の覚信尼さまに宛てたお手紙ですね。

岡村 比叡の「山を出でて」なんです。もし通いだったら、「殿の比叡におわします時、六角堂へ籠もり」などと書かれるでしょう。

釈 なるほど、もう山を下りちゃつてる、と。

岡村 出て、下りた、というふうに考えるべきなんです、あの文章からは。もう一つですね、これは私の願いというか思いなんですけれども、もしもですね、親鸞聖人が比叡山から通つておられるとなるとですね、比叡山にまだ残るといふことを選択肢として持つておられることになります。比叡山にいるけれども、ここでは自分はちよつと思ふようにいかない。そしたら他に何かないか？ では、ちよつと六角堂へ行つてみよう。でも、何もなかったら？

釈 だめだったら戻ろう、と。

岡村 「戻ろう」というような、比叡山と山を出るといふ二つの選択肢を両天秤にかける。言葉は悪いですけども、そんなことをされる方ではないんじゃないか。もつときつぱりと、ここではだめだと考えて、山を出る。「ここには私はもう戻つてこれないんだ」という潔さをお持ちではなかったか、と。それを「比叡の山を出でて」といふ言葉で表してあるんじゃないかと思つてはいますよ。

六角堂での夢告とは

釈 親鸞聖人には、夢と現実がシンクロ（同期）



岡村喜史さん

1962年奈良県生まれ。龍谷大学大学院博士課程単位取得退学。龍谷大学准教授を経て現在、本願寺史料研究所研究員。中央仏教学院講師。専門は真宗史。

するようなどころがありますよね。中世人というのはかなり夢を重視して、夢にこそ本当の世界があるというふうに考えたようですね。

岡村 非科学的な時代の中で、夢というのは非常に純粋なものだ、という意識はあったと思います。人が意識をもって話したり、行動したりするというのは、多かれ少なかれその人の意思が働いている。ところが夢というのは人の操作ができない世界ですので、それこそ非常に純粋なもので、判断に迷った時には夢に頼るといえるか、それを一つのきっかけや手がかかりにして新たな行動をとるとか、そういうことは中世人では一般的なことです。親鸞聖人も『教行信証』に書かれていますし、夢というものを決して軽くは見えておられず、一つの判断の素材として考えておられたんだと思います。

釈 夢のお告げがあり、法然聖人のもとへ、東山です。もともとはお手紙に偈文が添付されていたんですね。

岡村 そうなんです。恵信尼さまが覚信尼さまに送られた先ほどのお手紙に「この文は親鸞聖人が六角堂でみられたものです。あなたに見ていただくと思つて書いておきます」と書かれていますから、手紙と一緒にその偈文が付いていたんです。**釈** それが残っていれば、はっきりと内容がわかったのですが……。

岡村 添えられていたのは間違いありません。ところが、それが存在しない。ですから、いろいろな疑問、説が出てきて、聖徳太子の「廟窟偈」だという説もあります。しかし「女犯偈」にしても「廟窟偈」にしても、その偈文がきっかけで、法然聖人のところに直結するというのが、どうも話がつながらない。**釈** 確かに（笑）。



釈 徹宗さん

1961年大阪府生まれ。大阪府池田市・如来寺住職。相愛大学教授。専門は宗教学、比較宗教思想。グループホームを運営するNPO法人リライフ代表。

の吉水のほうへと身を投じられるわけですが。

岡村 夢の中で偈文（韻文の詩句）を受けられて、その偈文を手がかりに法然聖人のところに行かれますよね。

釈 その偈文が何か？ というのが課題としてありますね。

岡村 『御伝鈔』では「行者宿報設女犯」。

釈 「女犯偈」と呼ばれているところですね。

岡村 『御伝鈔』にはそのように書かれています。ほんとうは恵信尼さまのお手紙に付いていたはずの偈文が、今は確認できないんですね。

岡村 疑問がありますよね（笑）。なかなか明確な答えが出てこなくて、すっきりしない。ただ、『御伝鈔』を書いた覚如上人はですね、恵信尼さまのお手紙を確実に見ておられるんですよ。**釈** あ、なるほど。

岡村 覚如上人の『口伝鈔』などいろいろと見ていくと、恵信尼さまのお手紙の中に書かれていたことと同じようなことが書かれています。また、蔵に現存する恵信尼さまのお手紙には、覚如上人の筆のメモ書きが残っていますよね。

釈 ああ、そうなんですか。じゃあ見てらっしゃいますね。『御伝鈔』の「女犯偈」も根拠がないことではないということですね。

岡村 おそらく。その時には付いていた可能性はあるのかな、と。

釈 それはよい話をうかがいました。

岡村 それでも課題は残ります。法然聖人が妻帯

しておられたら非常にすつきりするんですけど、法然聖人は最後まで妻帯されておりませんので、法然聖人にたどり着くには距離感があります。ただ、法然聖人の教えを伝授されているわけではないので、親鸞聖人に結婚してもいいんだよ、というようなお話をされたかとも思いますが、なかなか難しいところですよ。ただ、法然聖人のもとでは、何人か結婚されている門弟もんていがおられるので、そういう環境を、なんらかの形で知っておられたのか、なっという気はします。

僧侶も世俗で暮らす

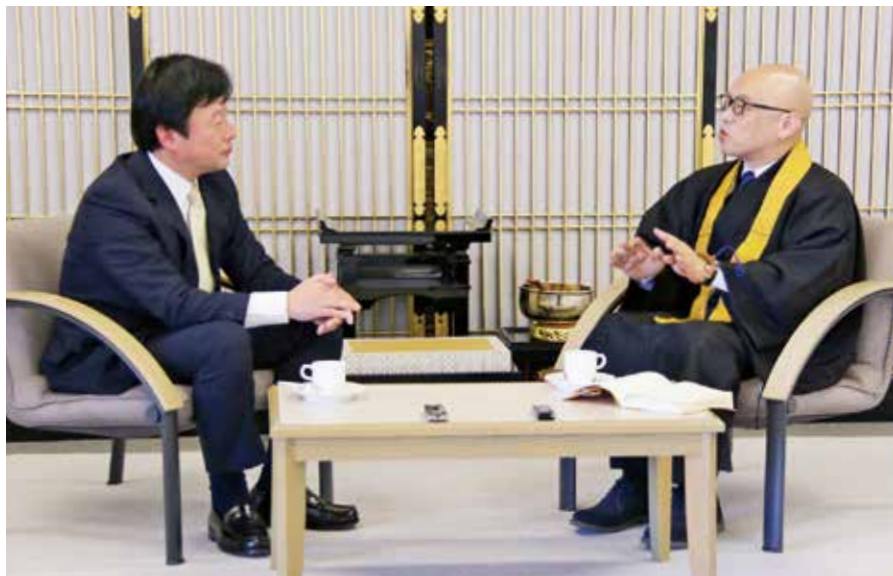
釈 言ってみれば、比叡山はある種のサンクチュアリ（聖域）ですが、日本の場合は、僧侶も世俗で暮らす、家族を持つという形があります。日本ではかなり初期からこの形があるのですか？

岡村 そうなんですよ。日本の戒律かいりつというのは非する素材がない。釈 そもそも結婚制度自体がない、というか、少なくとも現代の私たちとは全然違う形態ですね。

岡村 でも、僧侶が女性との間に子どもを持つというのは、結構頻繁にあることなんです。基本的に戒律で僧侶は結婚してはいけないと定められているから、子どもを持たないのが前提なんですけれど、自分のお寺だとか、自分の修行の後継者が必要ですよ。そうすると、お弟子さんをとるわけですよ。日本人は結構正直なので（笑）、お弟子さんを使い分けているんですよ。

岡村 「付弟ふてい」という書き方と、「真弟しんてい」という二つを書き分けているんです。付弟というのは、直接的な血縁関係のない方を弟子にとった場合。そうではなくて、自分の子どもと認知して弟子にする場合は真弟と書いています。

常に緩ゆるやかなんですよ。最初から緩やかで、特に、今のように戸籍がはつきりとしてない時代だと、何をもって結婚とするのかというのは、特定



釈 建前と実質の生活とを使い分けている、と。

岡村 そんななかにあつて、親鸞聖人は、自分い嘘うそをつかない、というところがあるのかなと思います。ほかの僧侶は夫婦生活があり、家庭を持っているのに、建前上では僧侶であるとしている。でも、親鸞聖人は、自分はある程度結婚をし、子どもを持つて家庭を持つて生きていくんだ、ということ表明されたところは大きいと思いますよ。家族のことにも苦慮しなけりゃいけない道ではあるんですが、そういう苦勞を背負いながら見事に仏道を生き抜かれたっていうところが、ある種、日本仏教の精華せいかという感じがします。

釈 だからこそ現在の私たちが、「家族みんなでお念仏する」というような教えを受けることができたわけですからね。

〈つづく〉

構成：塚村真美